

のダイナマイトが詰め込まれた。

いよいよ同時爆破を敢行、一瞬百雷と大噴火の光景。爆煙は天高く原爆投下のごとし。我等は事前に四キロの安全地帯に避難、夕食もなし、極寒地特有の長靴に襟の高い皮製の防寒具をまとい、空腹をこらえ、トボトボと歩く様は、実に捕虜とはこのやうなことから、親、兄妹、妻子に見せてたまるものと、思わず空を見上げれば、天高く底抜けの大空に満月がまた我を見下ろしている。

時折船の汽笛も聞こえる。海が近いことが判断できる。しかし戦友同志間でダモイの日はいつなのか、さまざまな情報の中で、三年間我慢しなければならなかった。運命はだれ一人知るよしもない、しだいに移動も遠のいて来た。自分はオッペカローナ本部当番について。点呼が終わるとソ連将校が俺を呼びにくるとき、将校の館に行ってみると、留守番である。

二歳足らずのいとし子を残して、夫婦そろってのバクチ打ち。目を覚まして泣いたらのビスケットもあずかる。私もベッドの上でこっくりこっくり、午前の一時こ

ろに帰る。日本の家庭と比較するに、彼らの心情はとも想像もつかない。

しだいに共産主義の教育が厳しくなる。ナホトカ集結地で最後の仕上げ教育も受ける。ついに復員船に乗る日が来た。船内で幾度となく身体のそここを力一杯ツネって、俺は夢でないだと確認した。歩けないほど衰弱したあの当時、今なおある生命力を大切に、亡き同胞の冥福を祈る。

洗脳教育もノルマ

新潟県 猪 俣 國 雄

潜伏性マラリアにおかされて、セミヨノフカの病院。一週間で熱もさがり、病氣も治った。収容所へ返されると思っていたら、政治局員(ゲ・ベ・ウ)に「病院で働け、ことわれば射殺する」とおどかされ、しかたなしに病院労働に従事することになった。抑留仲間が各収容所から栄養失調やけがで毎日十人、二十人と到着する。い

かなる病人も、「バーニヤ」（石を焼き、水をかけて蒸気を充満させたサウナ）には必ずいれてから、カルテがつけられ、幕舎の各病棟へ運ばれる。名前を知りえないうちに、五人、十人と毎日仲間達がなくなる。

丸太小屋の屍室へ運ばれる。ソ連の軍医達（中尉のチーフと若い将校三人くらい）がタポール（斧）と金切鋸、メスで解剖する。解剖屍体をほうごうし、片隅の屍台に重ね、血で密着し、凍りつけたしかばねを、近くで軽作業（ア・ラ・ポート）の仲間達が鉄棒で掘りおこした氷の穴に埋葬するのが、私にかせられたおもな日課であった。合掌して埋葬しても、氷片で上をおおうくらいがやつとである。夜ともなると、狼群の遠声が聞こえ、翌朝にはしかばねが散乱している。埋葬、散乱がくりかえされる。陽が当たると風下に向かって屍臭がかくさんしていく。

ある日、政治局員（ゲ・ペ・ウ）から「ウラジオストックへ行く、荷物をまとめて待機」の命令が出た。棚外に出ると、他の収容所から集められた三十人くらいの仲間達がいた。合流してアメリカ製の軍用トラックに分

乗し、春まじかの病院を出発した。氷の墓はしかばねが散乱していた。

着いたところは、ウラジオ港にけいりゆうされた貨物船二隻のまえだった。タラップをのぼると「沿海地方本部」の門標があり、そのそばに講師団とおぼしき日本人五人と、ソ連共産党のオルグ、責任者とみえる中佐が我々をむかえた。受講生入口の階段をおりると、二段ベッドがあり、そこが我々の宿舎兼居間だった。

わずかばかりの旅装をといて、腰かけているところへ、中佐、通訳、講師代表（高橋某——新聞記者）がやってきて、受講日程表を配った。期間は五十日、「ロシア共産党小史」「レーニン主義の諸問題」「マルクスの資本論」「アメリカ帝国主義」ほかとあり、沿海地方楽劇団指導と後記されていた。久しぶりにあたたかい黒パンとこいスープ、魚の塩漬けがくばられた。歓迎食なのだろうか。

夕方から甲板で労働歌「インターナショナル」と「ウラジオストックの歌」の指導が始められた。岸边に打ち返す波の彼方は日本、故郷新潟があると思うと、歌唱練

習もおさなりである。

翌日から講習が始まり、ロシア共産党の歴史、運動の法則、弁証法的史的唯物論とつづけられたが、講師も受講者も割当て時間をついやせばよい「ノルマは要領よくこなせ」の考えが共通で、一時間毎に顔を見せる中佐やオルグには、問題の解説をできるだけ長くやらせるようにと仕組んで、声高に討論したが、これが意外に好評で、中佐の「ハラショー」が連発するのだった。

中佐の機嫌が良いと休憩もタップリくれた。海から魚やタコ、貝類も多く採り、塩とソーヤをもらっての料理をしてやると、中佐をはじめソ連人の喜びと驚きの声が返ってきた。ノルマの一二〇%が連日続いた。

春が短いウラジオに、夏のひざしを感じ始めた頃、講習が終わった。ほとんどが各収容所へ帰るなかで、何か講師として残された。

「要領を本分とすべし」を座右の銘に一月くらいたつと、演劇脚本作成の命令が中佐から通訳をつうじて伝達され、楽劇団に紹介された。楽劇団は高名なチェリスト井上頼義氏が責任者、黒柳守綱氏がヴァイオリン担当

でセカンドマスターとしており、他にスタッフ総勢十人くらいが、各収容所巡回用の音楽、歌唱、演劇の練習をしていた。

脚本作製の割当時間は相当余裕があり、想をねると言っては甲板からはるかなる日本への郷愁にひたることのできた。

最初の脚本は、復員を待つ留守家族の生活を扱った「花束食堂」で、合格のしらせと同時に、若干のルーブル紙幣、外出許可証が女性通訳からわたされ、通訳、オルグにともなわれてウラジオ市街に外出した。軍港らしく水兵の姿が多い。セミチカや魚介類、煙草を売る娘達と声高に話し合っていた。

劇場にはいり、カザック踊りや種々な民族舞踊をソ連人の視線を感じながらみることができた。水壁の原始林、毎日多数の犠牲者、格子なき牢獄の日々が思いだされ、合掌する私に、通訳が何回となく「なにしてるの？」と問いたただすのだった。

ソ連側のねらった洗脳教育も、こうした抑留事実の前には、祖国帰還へのいやまずながいと、なき仲間達の悲

惨な最後を祖国に伝える事実伝達者としての意識をたかめるだけだと感じた。

ソ連軍侵攻から入ソまで

石川県 荒木 吉 秀

昭和二十年八月九日、午前零時半、飛行機の爆音に深夜の夢を破られた。所は東滿牡丹江省東寧県の城子溝。

私は第一六野戦貨物廠の警備隊に属し、第三分哨の分哨長として勤務中であつた。

早朝五時半、低空で侵攻してきたのはソ連機、直ちに非常呼集がかけられ、三か所の分哨陣地は増員されて警備を厳にした。

午後、松花江を挟んで彼我の砲撃が聞こえ、本部建物に敵軽爆の爆弾が命中して、情況はいよいよ切迫した。命を受けた兵らがタイマツに点火して、何十とある野積物資の山に火を放つて回る。たちまち白煙、黒煙が天地を覆う凄絶の巷と化した。分哨を焼却して後退の命が出

る。中隊の准尉が「青葉神社」に火を放った。

私は昭和十三年四月、中支の工兵部隊より復員、家郷にあること三年三か月で、昭和十六年の関特演に応募、牡丹江省掖河の歩兵第七連隊に入隊したが、二年後、転属して、国境の野戦貨物廠警備隊の勤務についていたのである。

八月十日、部隊は後退を開始、私物の賞状、通帳等すべて放棄する周章振りで、老黒山付近の遭遇戦で六名の死傷者を含み、羅子溝を経て十四日、朝陽川の四七貨物廠にたどり着いた。二百七十二キロの行軍であつたが、各地に分散駐屯していた我が部隊も漸く集結し得た。

この地一帯は、日韓併合のとき、日本への従属を嫌つて満州へ脱出した朝鮮人の部落が散在していたが、彼等も事態の対処に困惑しているように見えた。

十七日、隊長より「日本降伏」が告示され、翌日、下士官以下は兵器のすべてを大地に集積し、丸腰となつた。以後は木銃をもって、現地人らの襲撃、掠奪に抵抗するしかなかった。

九月一日、我が一六野戦貨物廠を主体とする捕虜大隊